

福島県出土のヒスイ製大珠について

山本 友紀

要 旨

福島県内出土のヒスイ製大珠・小珠を集成し、その分布、形態、時期等から全国的な動向を比較することで、県内での特徴を見出し、福島県から見たヒスイ製大珠の実態に迫る。

キーワード

ヒスイ 大珠 小珠 鯉節形 不整形 縄文時代中期後葉 流通 法正尻遺跡

1 はじめに

ヒスイは、古くは縄文時代からの利用が知られ、2016年には国石にも選ばれた。国石に選ばれるための必須条件には、①知名度・美しさ ②学術的重要性の2点が、また望ましいとされる条件に①日本人との関り ②継続性 ③持続性の3点が挙げられている(宮島2018)。ヒスイをよく知る人がこの条件を聞けば、国石に選ばれたのは必然と思えるだろう。このうち、「学術的重要性」「日本人との関り」については、その一部であるが、本稿でも言及するところである。

さて、国内におけるヒスイ産地はというと新潟県糸魚川市が真っ先に思い浮かぶが、実は日本では10数箇所で産出することが知られている。では、なぜ糸魚川ブランドのイメージが定着しているのか。それは、良質で美しいヒスイを多く産出するのが糸魚川市域だからである。これにいち早く気づいたのが縄文人で、縄文時代前期後葉にはすでにペンダント状に加工されていた。緑色に輝く透き通る石に神秘性を感じた縄文人。今でもパワーストーンや宝石などとして現代に息づいていることは、昔も今も変わらぬ感性が私たちにあることを教えてくれる。ちなみに、縄文時代のヒスイの利用は、世界的に見ても最古である。

考古学では、ヒスイは、黒曜石、アスファルト、コハク、オオツタノハなどと同様、原産地(供給源)が限られた資料として、移動・流通形態を知ることができる格好の資料とされる。特に縄文時代中期に盛行したヒスイ製大珠は、広域に流通する一方で出土遺跡が限定的であることから、社会的構造・背景を考えるうえでも有効な資料である。

ヒスイ製大珠は、福島県内でも出土しており、国

指定重要文化財の猪苗代町・磐梯町法正尻遺跡出土品や矢祭町我満平遺跡出土品は息を呑むほどの美しさで、見る者を魅了する圧倒的な存在感がある。筆者は以前法正尻遺跡出土品については資料紹介をし、併せて県内のヒスイ製大珠について体系的に述べたことがあるが、県内出土例を集成して提示するまでには至らなかった(山本2013)。

そこで本稿では、県内出土のヒスイ製大珠を集成し、分布、形態、時期、出土状況などを整理することによってその特徴を見出し、全国的動向と比較・検討しつつ、ヒスイ製大珠の実態に迫りたい。

なお、本稿は、2021年6月に福島県文化財センター白河館で発表した「縄文時代講座2」の内容をもとに、その後に得た知見や修正を加え、執筆したものである。

2 研究動向

ヒスイ製大珠を知るためには、まずはヒスイ利用の歴史・再発見史をひも解く必要があるが、ここでは紙幅の関係もあるため、詳細は先学にゆだねたい。

近年では、広域に分布するヒスイ製大珠の移動と流通形態及び社会構造との関係性について、積極的に研究が行われている。

栗島義明は、交易ルートを「ジェイド・ロード」と称して「長野・山梨ルート」及び「新潟・福島ルート」を大動脈とし、ここからいくつもの分岐ルートの存在が指摘できるとした(栗島2014)。また、原産地周辺でのヒスイ製大珠の分布は希薄で、遠隔地の特定空間に集中的にもたらされ、均一的に各集落へ分配されていた可能性も指摘している。加えて、同時期にヒスイの交易ルートと逆をたどるコハク(原産地は千葉県銚子市)の移動・流通についても同様であるとし、このことは、「価値ある財はよ

り遠くへと動き、また原産地から遠く離れるに従い財そのものに対する社会的価値が増大する」という、縄文社会の背景・要因があると指摘した(栗島2019)。このような背景から、今般ではヒスイとコハクは、希少財=威信財としての機能を有していたとする見方が定着しつつある。

3 福島県出土のヒスイ製大珠

(1) ヒスイ製大珠の定義

さて、論をより客観的に進めるために、本稿では鈴木克彦による記述を参考にヒスイ製大珠を以下に定義したい(鈴木2004)。

- ・材質 …ヒスイ輝石(jadeitie、硬玉)
- ・大きさ …完形の場合、長さ5 cm以上
- ・穿孔 …あり
- ・形態の名称…鯉節形：長楕円形を呈する。
基本的に左右対称。
緒締形：隅丸方形を呈し、長軸方向に穿孔される。
根付形：丸形を呈し、中央に穿孔される。
不整形：上記以外。



第1図 ヒスイ製大珠の形式

鈴木克彦は、「硬玉研究序論」として、ヒスイ製大珠の研究の方向性の明示及び一貫性を図るため、ヒスイ製大珠を定義した。その中で、ヒスイ製大珠の基本類型は鯉節形、緒締形、根付形であること、ここから派生してさらに細分が可能であること、全国の事例から見て大珠は5 cm以上として差し支えないこと、観察の着眼点などに言及した。これに倣い、本稿でも長さ5 cm以上は大珠、同3～5 cm未満は小珠、長さ3 cm以下は垂玉と呼称したい。小珠でも大珠に次ぐ又は同じような価値を有するものとして一定の評価をすべきで、垂玉もこれらを理解するための補完資料として重要であると考えている。

なお、「硬玉」「軟玉」の呼称は、かつてヒスイに

は硬玉と軟玉が存在するとされたが、両者は鉱物としては全く別物で、前者がヒスイ輝石、後者が透閃石岩や透緑閃石岩を主成分とする。したがって、ここでいうヒスイは硬玉を指し、軟玉はヒスイとは異なる石材を指すものとする。

(2) 形態分類

本稿では、大きさ(大分類)、形態(小分類)、状態(細分)から次のように分類したい。

- ・大分類…Ⅰ類：大珠(長さ5 cm以上)
Ⅱ類：小珠(長さ3 cm以上5 cm未満)
Ⅲ類：垂玉(長さ3 cm未満)
- ・小分類…A類：鯉節形
B類：不整形
- ・細分類…a類：完形
b類：準完形
(c類を再加工したことが明らかなもの)
c類：欠損
(割れ口に加工を施していないもの)
d類：未製品

(3) 集成

県内出土のヒスイ製大珠等を28遺跡・4地点で合計38点集成し、表1に観察表を、第3～5図に実測図を^{註1}提示した。Ⅰ・Ⅱ類のうち、出土状況が明確なもの、特徴的な出土状況を示すものについては、次に詳しく記載する。なお、今回、発掘調査報告書等で「硬玉製大珠」「ヒスイ製大珠」と報告はされているが、先の定義を満たさないもの(材質が異なる、大きさが満たないなど)については、再定義した旨、御了承願いたい。

法正尻遺跡(第3図2、第6図)

501号土坑に伴い、大木8b～9式期に比定される鯉節形大珠が1点出土した。

[遺跡の概要]

法正尻遺跡は、磐梯町と猪苗代町にまたがり所在し、標高600 m前後の翁島丘陵の北東部に立地する。縄文時代前期末葉から中期末葉を主体とする集落跡で、猪苗代湖北岸地域における当該期の拠点集落である。2021年に3回に渡り行われたまほろん20周年記念企画「法正尻遺跡展」では、これまであまり検討がされてこなかった集落構造について、

遺構の変遷をもとに再検討がなされた(福島県文化財センター白河館2021)。これによると、大木8b式期を画期にそれまでの「住居域と貯蔵域の分離」というムラの規範が失われ、居住域及び貯蔵域は墓域を含めて集約されるようになる。さらに大木9式期以降は、食糧貯蔵法の変化から大型のフラスコ状土坑が構築されなくなり、大木10式期には遺構配置の求心性も失われ終焉を迎える、とされた。この積極的な再評価は、集落構造の変遷が大木6～10式期まで連綿と追える点で、また当該地域の縄文社会構造を考えるうえで指標となり、大きな成果と言える。

本遺跡からは、在地系土器のほか火炎土器系、北陸系土器(上山田・天神山式土器)、関東系土器(阿玉台式土器など)などが出土している。

[ヒスイ製大珠]

出土した大珠はIAa類の中でも均整が取れた優品で、色調は淡い緑色、全体的によく磨かれ光沢がある。上端部には磨製石斧のつくりによく似た平坦面をもつ。

501号土坑底面直上からの出土で、底面のどの位置からかは不明である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸200cm×短軸125cm×深さ30cm(いずれも残存値)を測り、埋土は人為堆積である。底面はほぼ水平、周壁との境には溝やピットが断続して巡る特殊な形態を呈する。

このような特殊な形態の土坑は、遺跡内ではほかに6基確認されており、他地域の事例から見て墓の可能性が指摘されている。先述の企画展では、溝跡やピットの存在から、板壁を持つ墓坑であったことが想定された。この特殊性とヒスイ製大珠が出土したことから、501号土坑は、他の墓坑とは一線を画す存在であることが大いに推測される。

501号土坑の所属時期は、福島県教育委員会ほか1991では大木10式期以前とされたが、本書掲載の「縄文中期法正尻集落の再検討」において、概ね大木9式期との所見が提示されている。したがって、ヒスイ製大珠も同時期の所産であると判断する。

七郎内C遺跡(第4図9、第6図)

55号土坑に伴い不整形大珠が1点出土した。このほか、39号土坑からはコハク製の小玉が出土している。

[遺跡概要]

七郎内C遺跡は、石川郡石川町に所在し、阿武隈川右岸の社川との合流点付近、標高280m前後の阿武隈山地西縁丘陵地帯の段丘上に立地する。縄文時代中期中葉及び奈良～平安時代の集落跡で、特に縄文時代中期においては須賀川盆地における拠点集落とされる。

調査した範囲の中央部は、残念ながら後世の削平の影響があり遺構が希薄であるという。しかし台地縁辺部に住居が立地する様相は当該期の集落形態とも矛盾せず、概ね往時の景観をとどめていると言及されている。

本遺跡からは在地系土器のほか関東系土器(阿玉台式土器、加曽利E式土器)などが出土している。

[ヒスイ製大珠]

出土した大珠はIBa類で、三角柱に近い。色調は灰白色でさほど光を透過しない。おおむね丁寧に磨かれ平滑であるが、上下端には磨き残しが認められる。

55号土坑からの出土で、詳細な出土状況は不明である。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ水平、長軸103cm×短軸83cm×深さ10cmを測る。遺存状態が悪く、埋土が人為堆積か自然堆積かは不明であるが、その形態から墓の可能性が指摘されている。

[その他]

墓の可能性のある土坑が、ほかに8基確認されている。後世の削平の影響を恐れず言うならば、調査区中央は空閑地(広場)で、これを囲むように土坑が配されているように見える。このうち、55号土坑の対面にある39号土坑からは、コハク製の小玉が約50点出土している。大半は管玉状や臼玉状を呈し、大きさは長軸7mm前後を測るが、楕円形を呈し長軸27～28mmのやや大きめの小玉も2点出土している。土坑南半のやや東寄りに集中して検出されたことから、小玉は連珠状の首飾りと推測される。出土位置から、被葬者の首にかけられていたもしくはその付近におかれた可能性がある。

桑名邸遺跡(第3図7、第6図)

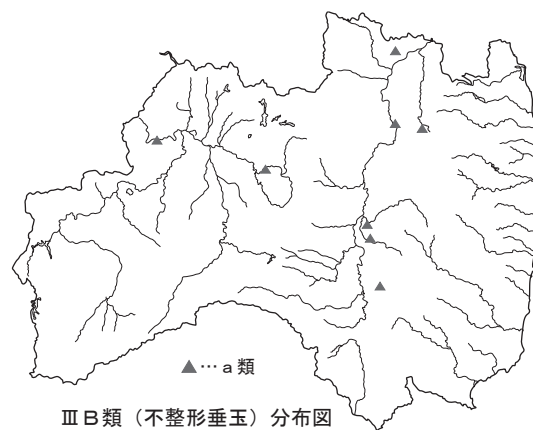
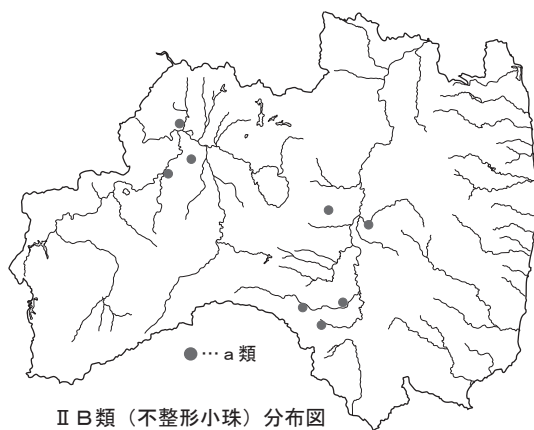
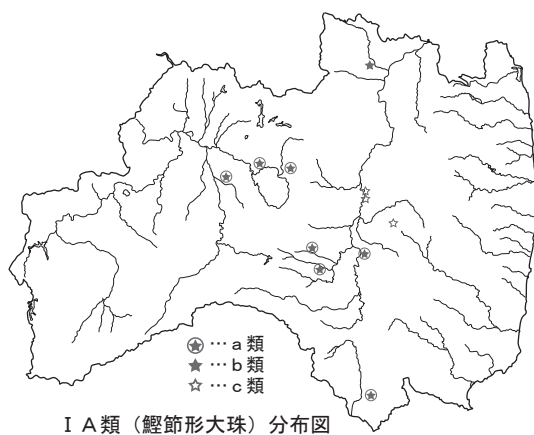
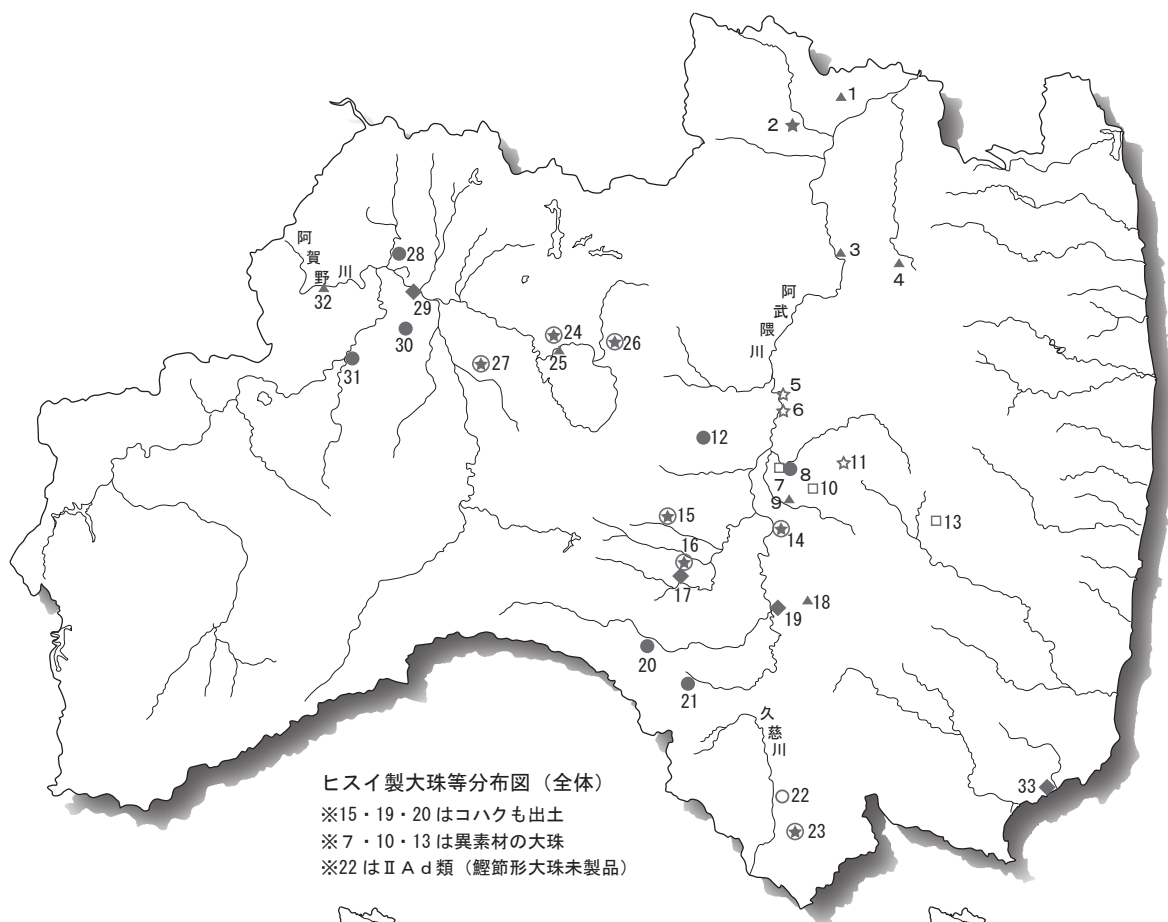
98号土坑に伴い、鯉節形大珠欠損品が1点出土した。また、完形の鯉節形大珠が1点表採されている(写真2)。

[遺跡概要]

福島県出土のヒスイ製大珠について

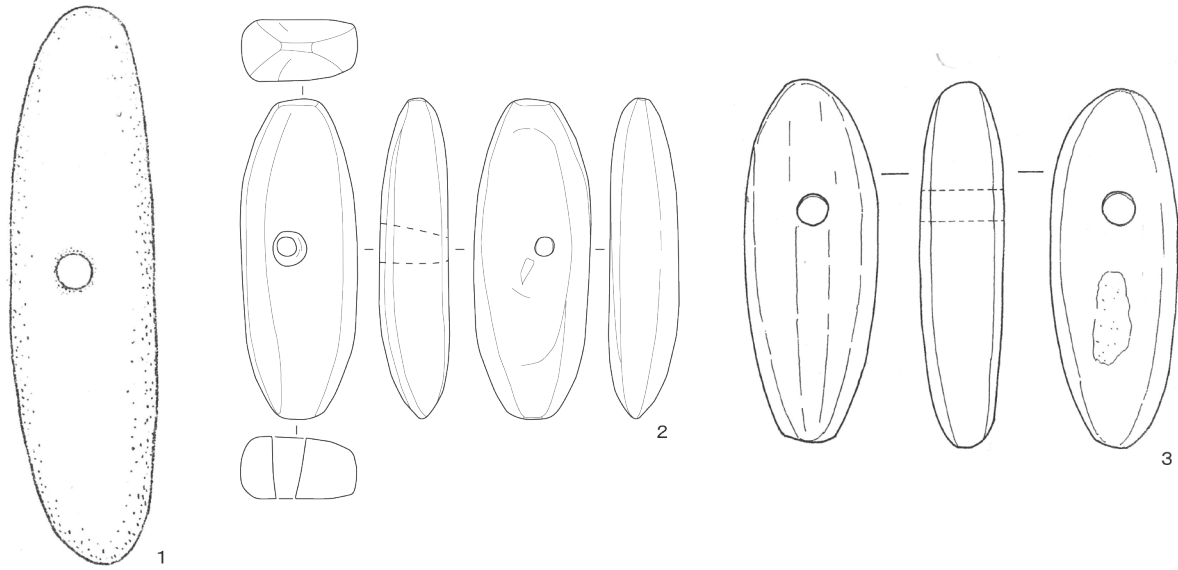
表 1 観察表

遺物No. 図 No.		遺跡 No.	遺跡名	所在	遺跡の概要		法量・属性													所蔵（所在）	備考
							出土遺構	時期	法量				穿孔		分類						
立地（標高）	特記	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	方向			a 面 (mm)	b 面 (mm)	大	小	細								
3	1	27	伝・大町	会津若松市大町	「大町」ではなく「大戸町」の可能性あり	表探	-	148	36	-	-	片面	-	-	I	A	a	個人（東京国立博物館寄託）	国指定重文		
3	2	24	法正尻遺跡	猪苗代町大字翁沢字遠山・磐梯町大字更科字遠平	丘陵北東部（600m 前後）	拠点的集落	501号土坑（墓）	中期後葉	84	31	14	97.5	片面	8	4	I	A	a	福島県教育委員会（まほろん）	国指定重文	
3	3	23	我満平遺跡	矢祭町中石井字我満平	丘陵西端部（約200m）	阿玉台式、大木9式期の出土が多い	表探（耕作中）	中期	95	35	22	149.9	片面	8	7	I	A	a	個人（福島県立博物館寄託）		
3	-	14	関向・富岡遺跡	須賀川市下小山田字関向・雨田字富岡	丘陵西側突端部	かつては段々畑に多量の遺物が散布	表探	-	76	22	14	43.0	片面	7	6	I	A	a	須賀川市（須賀川市立博物館）	首藤コレクション	
3	-	33	大畑貝塚	いわき市泉町下川大畑	丘陵上（42m）	貝塚	-	-	85	-	-	-	-	-	I	A	a	いわき市教育委員会	福島県史		
3	-	16	桑名邸遺跡	天栄村大字大里字西畑	低位砂礫段丘上（295m 前後）	拠点的集落	表探	-	64	-	-	-	-	-	I	A	a	個人	福島県史		
3	-	26	猪苗代町下館村	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	I	A	a	個人（六角コレクション）	猪苗代町史		
3	4	2	月崎 A 遺跡	福島市飯坂町中野字月崎	下位段丘上	拠点的集落	遺構外	中期中葉	41	28	15	132.8	片面	10	5	I	A	b	福島市（じょーもびあ宮畑）		
3	5	15	塚越遺跡	須賀川市長沼字北塚越・南塚越	河岸段丘上	拠点的集落	遺構外	中期後葉	50	65	22	117.0	片面	15	13	I	A	b	須賀川市（須賀川市歴史民俗資料館）		
3	6	5	馬場中路遺跡	郡山市西田町三丁目馬場	自然堤防上	拠点的集落	1号住居跡	中期末葉	106	45	35	281.0	片面			I	A	c	郡山市教育委員会	被熱	
3	7	16	桑名邸遺跡	天栄村大字大里字西畑	低位砂礫段丘上（290m）	拠点的集落	98号土坑	中期中葉	36	45	21	51.2	-	-	-	I	A	c	福島県教育委員会（まほろん）		
3	8	11	柳橋遺跡	郡山市中田町柳橋字向・町	丘陵上	集落縁辺部の調査	遺物包含層	後期前葉	46	37	28	68.5	不明	-	-	I	A	c	郡山市教育委員会		
3	-	6	曲木沢遺跡	郡山市富久山町根木屋字曲木沢	丘陵上	拠点的集落（環状集落）	13号住居跡	中期末葉	75	53	32	178.5	不明	-	-	I	A	c	郡山市教育委員会	被熱	
4	9	19	七郎内 C 遺跡	石川町下ノ内	丘陵地帯の段丘上（280m 前後）	拠点的集落（環状集落）	55号土坑（墓）	中期前葉～中葉	64	26	30	103.0	片面	10	5	I	B	a	福島県教育委員会（まほろん）		
4	10	17	町屋遺跡	白河市大信町字町屋	中段段丘面上	拠点的集落	風倒木痕	-	75	25	15	53.3	片面	9	5	I	B	a	白河市（白河市歴史民俗資料館）	市指定重文	
4	11	15	塚越遺跡	須賀川市長沼字北塚越・南塚越	河岸段丘上	拠点的集落	遺構外	中期後葉	60	31	16	56.0	両面	8	8	I	B	a	須賀川市（須賀川市歴史民俗資料館）		
4	-	17	町屋遺跡	白河市大信町字町屋	沖積地	拠点的集落	表探	-	50	29	16	35.9	片面	8	4	I	B	a	個人（福島県立博物館寄託）		
4	-	29	牛沢	会津坂下町	-	-	表探	-	70	-	-	-	-	-	I	B	a	個人	会津坂下町史ほか		
4	12	22	岡野田遺跡	矢祭町大字宝坂字岡野田	河岸段丘上（200～210m）	拠点的集落	7号住居跡	後期前葉	44	16	8	-	なし	-	-	Ⅱ	A	d	矢祭町教育委員会	県内唯一の未製品	
4	13	15	塚越遺跡	須賀川市長沼字北塚越・南塚越	河岸段丘上	拠点的集落	遺構外	中期後葉	46	21	18	32.0	片面	7	4	Ⅱ	B	a	須賀川市（須賀川市歴史民俗資料館）		
4	14	5	馬場中路遺跡	郡山市西田町三丁目馬場	氾濫原に当たる低地	拠点的集落	遺物包含層	（縄文前～後期初頭）	45	30	18	35.5	片面	9	6	Ⅱ	B	a	郡山市教育委員会		
4	15	21	内松 B 遺跡	白河市表郷内松字作田	段丘面上	拠点的集落	試掘調査	中期後半	42	23	10	-	-	-	-	Ⅱ	B	a	個人		
4	16	30	北川前遺跡	会津坂下町大字宇内字北川前	段丘面上		遺構外	中期後葉	36	15	8	8.0	両面	3	3	Ⅱ	B	a	会津坂下町教育委員会（埋蔵文化財センター）	被熱	
4	17	28	上林遺跡	山都町大字木幡字東原・中杭塚・道東	河岸段丘上（200m 前後）		表探	-	43	25	11	-	片面	6	6	Ⅱ	B	a	個人（福島県立博物館寄託）	穿孔×1 盲孔×1	
4	18	20	南堀切遺跡	白河市新白河・高山	沖積地	コハク製大玉 1 点出土	5号土坑	中期中葉	37	17	9	9.6	両面	7	7	Ⅱ	B	a	白河市（白河市歴史民俗資料館）		
4	19	22	岡野田遺跡	矢祭町大字宝坂字岡野田	河岸段丘上（200～210m）		60号土坑	中期中葉	44	42	16	8	片面	6	4	Ⅱ	B	a	矢祭町教育委員会		
4	20	8	下羽広遺跡	郡山市中田町高倉字下羽広・竹ノ	台地上	拠点的集落	319号ピット	晩期？	31	22	12	15.1	片面	5	3	Ⅱ	B	a	郡山市教育委員会		
4	21	12	上納豆内遺跡	郡山市逢瀬町河内字上納豆内	丘陵上微高地	拠点的集落（環状集落）	遺構外	中期末葉	33	20	8	9.5	片面	7.5	6	Ⅱ	B	a	郡山市教育委員会		
4	-	31	石生前遺跡	柳津町大字郷戸字石生前	上位河岸段丘	拠点的集落	表探	（中期中～後葉）	31	17	11	-	片面	6	5	Ⅱ	B	a	柳津町教育委員会（やないづ縄文館）	県指定重文	
5	22	9	荒小路遺跡	郡山市田村町谷田川字荒小路	河岸段丘最上位段丘面上	拠点的集落	遺物包含層	後期前葉～中葉	28	18	16	8.7	片面	6	3.5	Ⅲ	B	a	福島県教育委員会（まほろん）		
5	23	3	和台遺跡	福島市飯野町大字飯野字後川	舌状台地先端部（195m）	拠点的集落（環状集落）	2159号土坑	中期後葉	22	20	10	7.4	片面	3	2	Ⅲ	B	a	福島市（（財）福島市振興公社）	このほか1点出土	
5	24	18	小田口 D 遺跡	石川町大字母畑字小田口	小尾根平坦面		5号住居跡	中期末葉	24	15	6	3.3	片面	7	4	Ⅲ	B	a	福島県教育委員会（まほろん）		
5	25	32	上小島遺跡	河沼郡西会津町登世島字塩田・舟場上・馬場下	河岸段丘上	拠点的集落	遺物包含層	中期後半	24	16	5	-	片面	4	2	Ⅲ	B	a	西会津町教育委員会（旧新郷小学校）	県指定重文	
-	-	1	南半田	桑折町	-	-	表探	-	28	21	12	9.9	片面	6	5	Ⅲ	B	a	個人（福島県立博物館寄託）		
-	-	4	前田遺跡	川俣町大字小綱木字前田	河岸段丘上	拠点的集落	遺構外	後期	現在整理中						Ⅲ	B	a	福島県教育委員会（福島県文化振興財団）	2点出土		
-	-	25	蟹沢浜湖底遺跡	猪苗代町大字翁沢字浜道・小浜・浜下	猪苗代北岸低地～湖中（514 m）	-	-	-	24	-	-	-	-	-	Ⅲ	B	a	-	福島県史		
ヒスイ製以外の大珠等（参考）																					
7	26	7	町 B 遺跡	郡山市西田町鬼生田字町	段丘面上		遺構外	不明	69	43	32	185.0	片面	10	6	I	A	b	郡山市教育委員会	黒色頁岩質系	
7	27	10	鴨打 A 遺跡	田村町手代木字鴨打	独立丘陵上		2号ステパ	不明	37	44	2	13.0	両面	8	8	Ⅱ	A	b	郡山市教育委員会	石材不明	
7	28	13	矢大臣遺跡	小野町大字湯川字矢大臣山西麓	拠点的集落	第1遺物包含層	後期前葉	41	28	15	99.1	片面	-	-	Ⅱ	A	c	小野町教育委員会（おのまち文化の館）	透閃石岩系		
7	29	20	南堀切遺跡	白河市新白河・高山	沖積地		3号土坑（墓）	中期中葉	35	35	26	16.3	片面		6	Ⅱ	B	a	白河市（白河市歴史民俗資料館）	コハク	

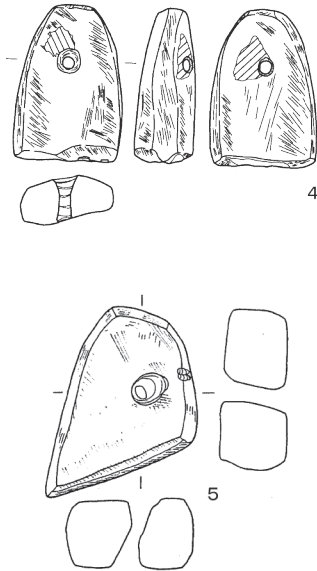


第2図 出土遺跡分布図

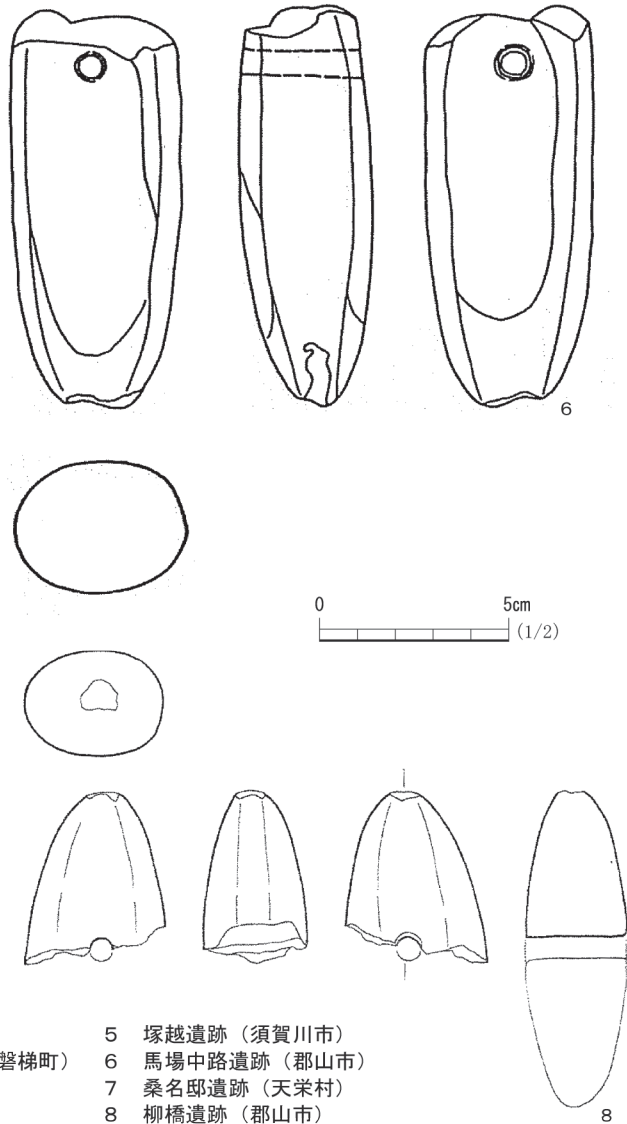
〈I A a 類〉



〈I A b 類〉



〈I A c 類〉



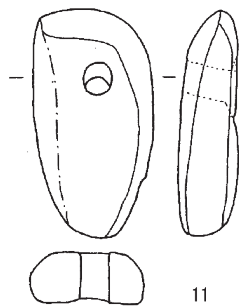
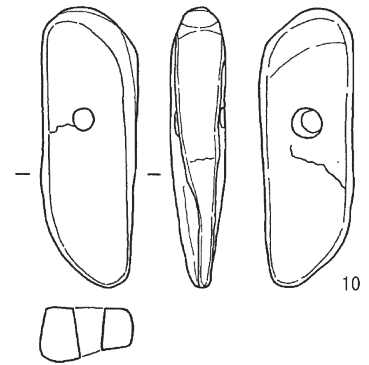
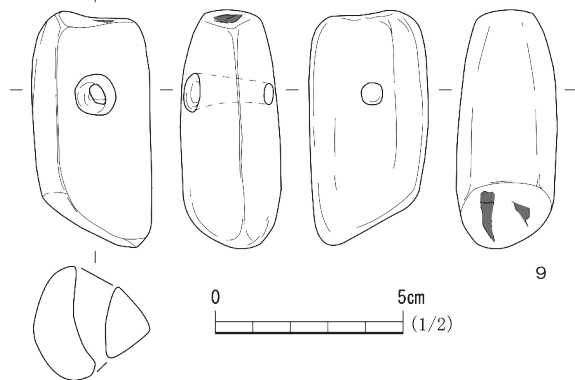
- | | |
|-------------------|---------------|
| 1 伝大町（会津若松市） | 5 塚越遺跡（須賀川市） |
| 2 法正尻遺跡（猪苗代町・磐梯町） | 6 馬場中路遺跡（郡山市） |
| 3 我満平遺跡（矢祭町） | 7 桑名邸遺跡（天栄村） |
| 4 月崎A遺跡（福島市） | 8 柳橋遺跡（郡山市） |

第3図 福島県出土のヒスイ製大珠等集成①

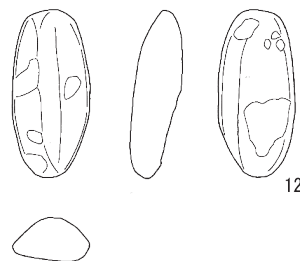
〈I B a類〉



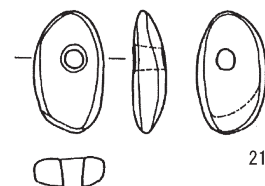
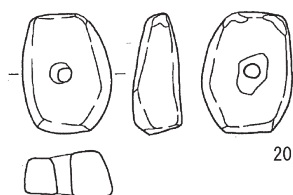
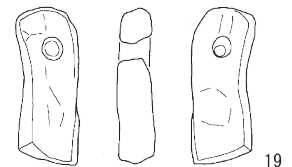
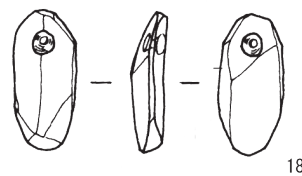
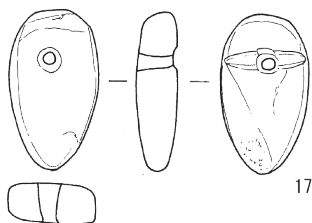
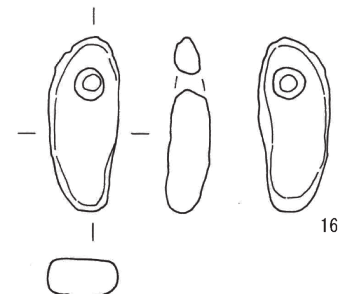
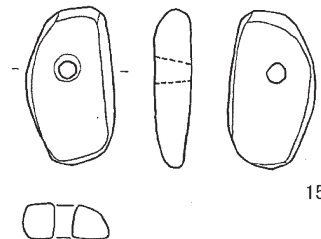
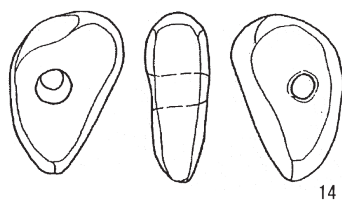
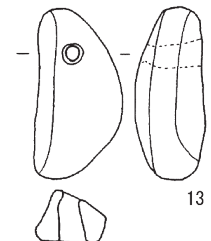
…未調整部



〈II A d類〉

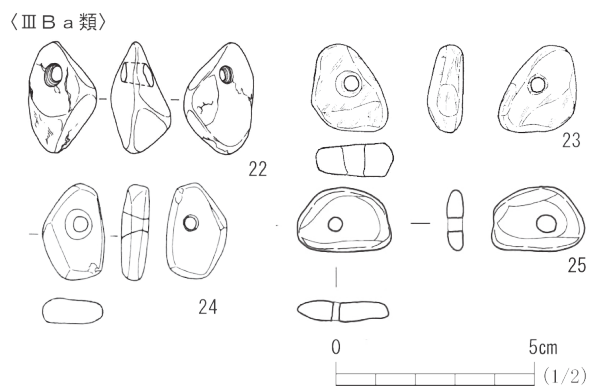


〈II B a類〉



- 9 七郎内C遺跡（石川町）
- 10 町屋遺跡（白河市）
- 11・13 塚越遺跡（須賀川市）
- 12・19 岡野田遺跡（矢祭町）
- 14 馬場中路遺跡（郡山市）
- 15 内松B遺跡
- 16 北川前遺跡（会津坂下町）
- 17 上林遺跡（喜多方市）
- 18 南堀切遺跡（白河市）
- 20 下羽広遺跡（郡山市）
- 21 上納豆内遺跡（郡山市）

第4図 福島県出土のヒスイ製大珠等集成②



22 荒小路遺跡（郡山市） 24 小田口D遺跡（石川町）
23 和台遺跡（福島市） 25 上小島遺跡（西会津町）

第5図 福島県出土のヒスイ製大珠等集成③

桑名邸遺跡は岩瀬郡天栄村に所在し、龍田川南岸に形成された標高約290mの低位砂礫段丘上に立地する。縄文時代早期～晩期、古墳時代、平安時代の複合遺跡で、主体は縄文時代中期中葉の集落跡である。調査は遺跡北縁部と東端部で実施され、立地からして集落の中心部ではないと予想されるが、511基もの土坑が検出された。このうち、30%はフラスコ状土坑である。

本遺跡からは、在地系土器のほか、火炎土器系、関東系（阿玉台式土器、加曾利E式土器）などが出土している。

〔ヒスイ製大珠〕

出土したヒスイ製大珠は、ⅠA c類である。乳白色を呈し透明度はないが、所々に緑色が混じる。

98号土坑からの出土で、平面形は概ね楕円形、長軸94cm（残存値）×短軸87cm×深さ23cmを測る。底面形はやや弧状を呈し、壁の立ち上がりは外に開く。周囲には大型のフラスコ状土坑が切り合いながら隣接しているが、これらに比べると98号土坑は小ぶりである。

南堀切遺跡（第4図18、第6図、第8図29、写真5）

5号土坑に伴い、縄文時代中期前半に比定される不整形小珠が1点出土した。なお、3号土坑からはコハク製大珠が1点出土している。

〔遺跡概要〕

南堀切遺跡は、白河市新白河及び高山に所在し、標高約370mの低平な台地上に立地する。一部の調査で全体は把握できないが、縄文時代早期～中期にかけての集落跡で、主体は中期前半である。

〔ヒスイ製小珠〕

出土した小珠はⅢB a類に分類され、全体的に乳白色だが、片面の一部は透明度がある緑色を呈する。磨かれてはいるが側縁は陵を持ち、扁平で角張った印象を受ける。

I区の土坑群内にある5号土坑からの出土で、土坑内での出土位置は不明である。平面形は楕円形、長軸175cm×短軸40cm×深さ5～15cmを測る。底面はほぼ水平で、周壁の境には21基のピットが巡り、中央部にも4基のピットが配される。このような特殊な形態の土坑は、土坑群内で唯一である。ヒスイ製小珠の出土から墓の可能性が指摘されている。なお、阿玉台式期の土器片も出土していることから、縄文時代中期前半に属する土坑で、ヒスイ製小珠も当該期の所産であると推測される。

〔その他〕

3号土坑からコハク製大珠が1点出土した。赤褐色を呈し、貫通孔が1孔認められる。丁寧に磨かれ光沢があり、縞状（木目状）に入る斑がとても美しい。

3号土坑は、ヒスイ製小珠が出土した5号土坑から西に3mと近距離に位置する。平面形は概ね楕円形、長軸200cm×短軸100cm×深さ約25cmを測る。底面は中央部が若干盛り上がっているが、ほぼ水平である。チャート製の石鏃6点と共に土坑の中央部付近からまとまって出土した。他県では土壌墓に石鏃の副葬事例があることなどから、3号土坑も墓の可能性が指摘されている。なお、阿玉台式期の土器片も出土していることから、縄文時代中期に属する土坑で、コハク製大珠も当該期の所産であると推測される。

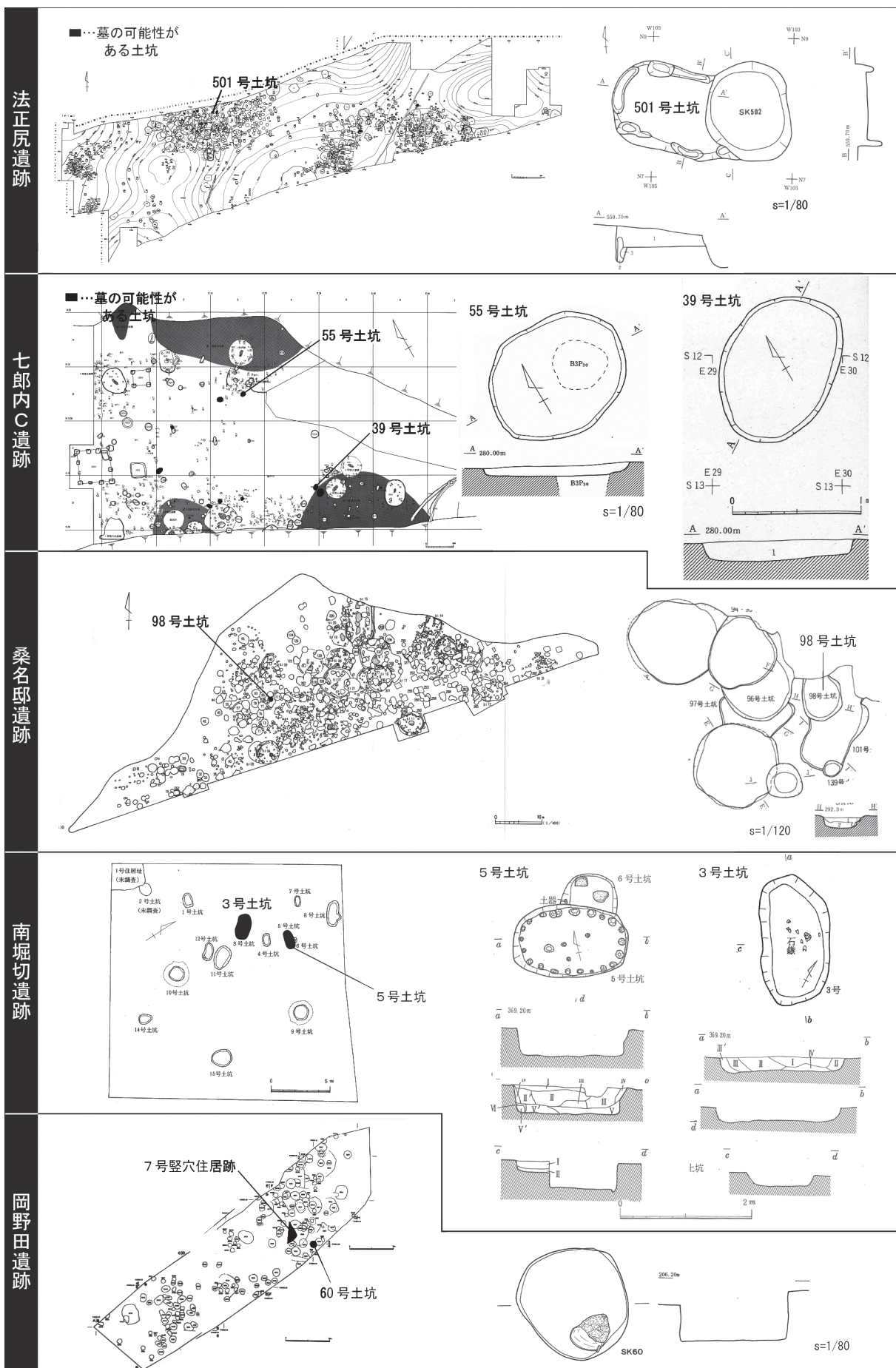
塚越遺跡（第3図5、第4図11・13、写真4）

遺構外から鯉節形大珠欠損品1点、不整形大珠1点、小珠1点の計3点出土した。このほか、104号土坑からコハク製の小玉が出土している。

〔遺跡概要〕

塚越遺跡は、須賀川市長沼町に所在し、簗ノ子川と江花川によって形成された河岸段丘上に立地する。縄文時代中期中葉～末葉、縄文時代後～晩期、弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世に断続的に営まれた集落跡で、特に縄文時代中期においては、当該地域の拠点集落と考えられている。

縄文時代の集落跡は、竪穴住居跡の切り合い関係から、中期の大木8a式期から後期の綱取Ⅱ式期ま



での7期想定され、特に遺構が多く発見された大木8b式期から大木9式期にかけては継続的に営まれ、盛期を迎えていたとされる。

〔ヒスイ製大珠等〕

3点出土し、いずれも遺構外の出土である。第3図5はⅠA b類に分類される大珠上半部で、底辺には擦切痕のような陵をもつ。表裏面は幅広く扁平で、色調は乳白色を呈し、光は透過しない。第4図13はⅡB a類に分類される。勾玉状に背面をつくり出し、腹面も若干括れている。

〔その他〕

104号土坑からコハク製の小玉が複数個出土している。墓坑と考えられており、平面系は長楕円形、長軸160cm×短軸55cm×深さ60cm、底面は平坦である。土坑の北西端付近(立ち上がり部)でまとまって出土した。この直上では、大木8b式期の土器が横位につぶれた状態で出土していたことから、104号土坑は大木8b式期に所属し、コハク製小玉も当該期の所産であると推測する。

コハク製小玉にはいずれも貫通孔が穿たれていることから、紐に通され首飾りとされていたと推測される。

岡野田遺跡(第4図12・19、第6図)

7号竪穴住居跡から鯉節形小珠未製品が、60号土坑から不整形小珠がそれぞれ1点ずつ出土した。

〔遺跡の概要〕

岡野田遺跡は、東白川郡矢祭町大字宝坂字岡野田・竹ノ内に所在し、久慈川の支流、田川と手元川の合流地点、標高200～210mの河岸段丘上に立地する。縄文時代中期後半から後期前葉を主体とする集落跡で、この前段階の大木7b～8式期のフラスコ状土坑群も確認されている。

〔ヒスイ製小珠〕

第4図12はⅡA d類で、本県唯一の未製品である。色調は透明感のある緑色を呈する。第4図19はⅡB a類で、板状を呈する。

〔出土遺構〕

第4図12は後期前葉に比定される7号竪穴住居跡、第4図19は中期中葉に比定される60号土坑からの出土で、それぞれ遺構内のどの位置からの出土かは不明である。所属時期が違うため何とも言い難いが、これらが近距離に位置することは、集落構造

を考えるうえで手掛かりとなるかもしれない。

(4) 概観

ここでは、属性ごとに概観したい。

形態・大きさ

Ⅰ類(大珠)は18点、Ⅱ類(小珠)は11点、Ⅲ類(垂玉)は9点確認できた。A類はⅠ類、Ⅱ・Ⅲ類はB a類が大半であった。これは、鯉節形はある程度の大きさの素材(約5cm以上)に対してつくられるものであること、不整形は鯉節形と違い打ち割られることはなく、最終形態が完形品であることなどを意味していると推察される。

大きさは、10cm以上を大型品とするならば、会津若松市伝大町出土のⅠA a類(第3図1)が長さ14.8cm、欠損品ではあるが、郡山市馬場中路遺跡出土のⅠA c類(第3図6)が10.6cmで、2点確認できた。

〔ⅠA類：鯉節形大珠〕

ⅠA a類は5遺跡2地点で7点(内6点は表採資料)確認でき、1遺跡・地点1点ずつの出土である。発掘調査によって出土したものは法正尻遺跡のみで、出土状況及び所属時期が明確な点で重要である。法正尻遺跡及び我満平遺跡出土品は、石質・形の均衡・仕上げ(研磨)などどれをとっても優れており、県内のヒスイ製大珠の中では群を抜いた優品と言える。ⅠA b類は2遺跡2点、ⅠA c類は4遺跡4点確認できた。前者は、母体となったⅠA a類を打ち割ったのち、割れ口を整形・研磨して再利用(二次加工)したもの、後者は打ち割ったのみで再利用しなかったものと推測する^{註2}。

〔ⅠB類：不整形大珠〕

本類はⅠB a類のみであった。4遺跡5点確認でき、七郎内C遺跡以外は遺構外の出土である。白河市町屋遺跡からは2点出土している。このうちの一点は図版未掲載ではあるが、勾玉状に背と腹をつくり出したような形状で、貫通孔1孔と盲孔があるものが表採されている。勾玉状に整形された例は、塚越遺跡出土のⅡB a類(第4図13)でも認められた。

〔ⅡA類：鯉節形小珠〕

本類はⅡA d類のみで、岡野田遺跡出土品が本県唯一の未製品である。

〔ⅡB類：不整形小珠〕

本類はⅡB a類のみで、10遺跡10点確認できた。

素材の形を生かして整形したと思われるため、形は一樣ではないが、中には勾玉や三角形、楕円形に近いものはある。

〔ⅢB類：不整形垂玉〕

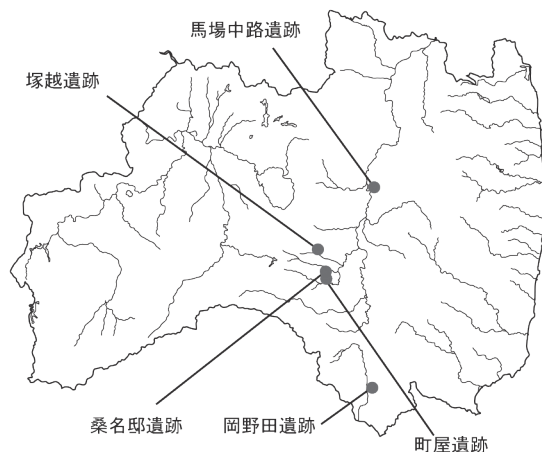
本類はⅢBa類のみで、7遺跡9点確認できた。

出土状況・時期

所属時期が明確なものは少ないが、Ⅰ・Ⅱ類は概ね縄文時代中期中葉から後葉にかけて、特に大木8b～9式期に集中し、Ⅲ類は中期末葉から後期前葉に認められる傾向にある。

遺構から出土したのは法正尻遺跡、七郎内C遺跡、桑名邸遺跡、南堀切遺跡、馬場中路遺跡、曲木沢遺跡、岡野田遺跡などで、土坑及び住居跡からの出土である。法正尻遺跡、七郎内C遺跡、南堀切遺跡では墓と推測される土坑からの出土で、特に法正尻遺跡・南堀切遺跡は土坑内周にピットや溝跡が巡るなど特殊な形態を呈しており、ヒスイ製大珠・小珠の出土と併せて、他の墓とは一線を画する存在であると推測される。加えて、南堀切遺跡・七郎内C遺跡からは、別の土坑であるがコハクも出土している点は注視したい。集落全体でみれば、法正尻遺跡・桑名邸遺跡・岡野田遺跡はフラスコ状土坑群内の土坑からの出土である点は特徴的である。七郎内C遺跡は、環状集落内帯の土坑からの出土であるとするれば、後述する関東地方の様相に近い。なお、土坑以外では、馬場中路遺跡、曲木沢遺跡、岡野田遺跡で竪穴住居跡から出土している。前者2遺跡はごく近距離に位置し、ⅠAc類であることに加え被熱痕が認められる点は興味深い。

Ⅰ・Ⅱ類が複数出土している遺跡(第7図)は、塚越遺跡、桑名邸遺跡、町屋遺跡、馬場中路遺跡、岡



第7図 ヒスイ製大珠等を複数個出土した遺跡

野田遺跡の5遺跡ある。塚越遺跡では3点出土しており、県内最多である。なお、塚越遺跡、桑名邸遺跡、町屋遺跡は半径約10km圏内と近距離に分布している。Ⅲ類では、福島市和台遺跡や川俣町前田遺跡でそれぞれ2点ずつ出土している。

分布状況

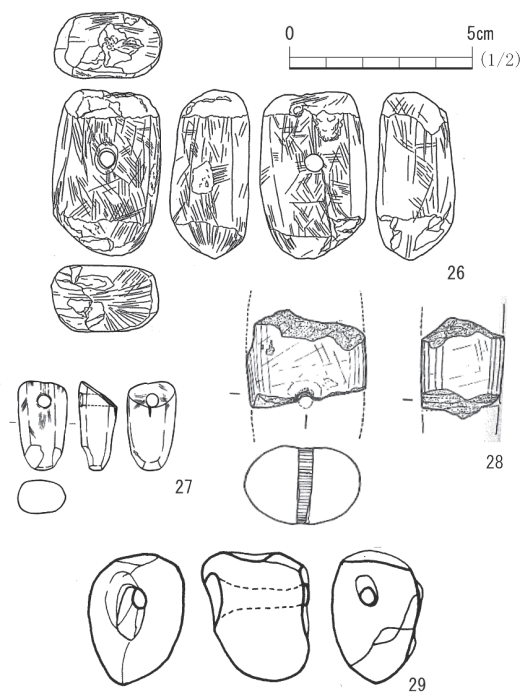
主に阿賀川及び阿武隈川流域に分布し、阿武隈川流域にあつては郡山市以南に多く見られる。福島県の地形は、縦断する西の越後山脈、中央の奥羽山脈、東の阿武隈高地に大きく制約され、これらを境に西から会津地方、中通り地方、浜通り地方の3地域にわけられる。これらの山脈によって県域の横断はルートが限定され、昔も今も会津盆地、郡山盆地などは交通の要衝とされてきた。“ヒスイ製大珠の出土＝縄文時代の拠点集落＝交通の要衝”という構図は、必然のように思う。なお、浜通り地方では、いわき市大畑貝塚(縄文時代中期)や後晩期には少量見られるものの、ほとんど分布しない。のちに述べるコハクとの関係に起因するものかもしれない。さらに、現在のところ、南会津地区も空白地帯となっている。

その他

北川前遺跡出土品(第4図16)は被熱し粉々に砕けた状態で出土した。後世の削平により遺構は明確ではないが、ほぼ同じ場所から完形に近い甕が出土したことから、墓の可能性が指摘されている。先にも述べたが、馬場中路遺跡(第3図6)及び曲木沢遺跡(写真3)のⅠAb類も表面が荒れ、色調が若干茶色味がかっている状況があり、被熱の可能性が高い。特に曲木沢遺出土品は13号住居跡の炉上面からの出土で、火にくべられた可能性はある^{註3}。

喜多方市上林遺跡出土品(第4図17)は、孔と直行する穿孔痕が認められることが特徴的である。この痕跡は、完形品の大珠又は小珠を縦に分割したためにできた元々の孔の名残なのか、意図して(擦切りにより)溝を付けたものかは不明である。前者であれば分割行為、後者であれば装飾又は穿孔の労力軽減のためなどが想定される。

最後に、ヒスイ製ではない大珠等が少なからず存在するため、ここで紹介したい。先の分類に当てはめると、郡山市町B遺跡出土品(第8図26)はⅠAb類、同鴨打A遺跡出土品(第8図27)はⅡAb類、



26 町B遺跡（郡山市） 28 矢大臣遺跡（小野町）
27 鴨内A遺跡（郡山市） 29 南堀切遺跡（白河市）

第8図 ヒスイ製以外の大珠

小野町矢大臣遺跡出土品（第8図28）はⅡA c類となり、これらは鯉節形大珠と推測される。加えて、完形品を割った又は割って再加工してあり、形ばかりかその行為までも共通した可能性が高い。確実に時期比定できるのは矢大臣遺跡出土品のみで、後期前葉の所産である。南堀切遺跡のコハク製大珠（第8図29）の詳細は、前述のとおりである。

4 全国的動向との比較

ここまでで、福島県出土のヒスイ製大珠を集成することにより、それぞれの属性について概観し、傾向をまとめた。本項からは、これらが全国的な動向と比較した場合、どのようなことが言えるかを整理してみたい。

（1）形態・大きさ

全国的に、鯉節形は広域、緒締形は関東地方、根付形は東北地方北部に偏在する傾向にある。当県では、ⅠA類の鯉節形が主体的に出土し、他はⅠB類の不整形で緒締形・根付形は認められなかったことから、この傾向が追認できた。

大きさは、当県では10 cm以下がほとんどで大型品が少ない傾向にあるが、馬場中路遺跡ⅠA c類（第3図6）が完形品ならば20 cmに迫る超大型大珠にな

り、全国でも最大級である。一方、隣県の栃木県・茨城県では10 cmを超える大型品が多く認められるため、大型品が当該地域に選択的に流通していた可能性がある。

（2）出土状況

全国的に、1遺跡1～2点の出土で、当該地域の拠点集落で確認され墓に副葬される例が多い。空間的に見れば、関東地方では、環状集落中央部に展開する墓域中心部の土坑から出土する傾向にあり（茨城県坪井上遺跡など）、一方で中部地方では墓域中心部から外れた土坑やひとつの土坑に複数副葬される傾向にあるという（長野県上木戸遺跡など）。このことは、原産地からの距離が比較的近い中部地方ではヒスイ製大珠の社会的価値（希少性）が低いことを示唆し、それは地域社会によって価値が相違した結果であるとする見方がある（栗島2019）。この見方は原産地周辺にも適用でき、製品が集落から出土することがほとんどない生産遺跡（供給側）では、需要側とのヒスイへの価値認識が異なっていたとされる。

さて、当県でも墓と推測される土坑からの出土例が大珠で2例（法正尻遺跡、七郎内C遺跡）、小珠で1例（南堀切遺跡）確認できた。土坑出土の大珠・小珠は桑名邸遺跡及び岡野田遺跡でも確認でき、これらが副葬品であれば当該土坑も墓の可能性は十分ある。ただし、フラスコ状土坑群内に位置し平面形はフラスコ状土坑と大差ないことから、墓としては違和感がある。翻して考えれば、やや飛躍的ではあるがフラスコ状土坑としている土坑の中には墓の機能を有している物があるのではないかと考えられる。

なお、南堀切遺跡をはじめ発掘調査は集落遺跡のごく一部の調査にとどまり、残念ながら集落構造を把握できるまでには至らないものが多く、また、報告書に詳細な出土位置の記載がないこと、表採資料が多いことなどから、本県では空間として出土状況を検討することが難しい状況である。その中でも、七郎内C遺跡では環状集落内帯の土坑から、また法正尻遺跡、桑名邸遺跡、岡野田遺跡ではフラスコ状土坑群内の土坑からの出土が確認でき、一定の成果はあったと思われる。加えて、異素材の大珠で紹介した矢大臣遺跡、町B遺跡などは廃棄域からの出

土で、特に前者は破壊されたままである。役目を終え廃棄されたと考えるならば、報告書等で「遺構外出土」「遺物包含層出土」と表記されたヒスイ製大珠も、その役目を終えて廃棄された可能性もあるため、遺構外でも集落のどこで出土したかは重要である。

ヒスイ製大珠等を複数保有する遺跡は、県内では5遺跡確認でき、県南地域に集中する傾向にある。全国で最多の保有数を誇るのは茨城県常陸大宮市坪井上遺跡の8点(発掘調査出土品3点、採取品5点)で、そのすべてが7cmを超える優品である(瓦吹2012)。北関東地域では複数保有する遺跡が顕著に存在し、これらは流通ルートの一環に位置する可能性があることから、入手・確保に深くかわかり、地域集団への分配や配分に強い影響力があったとする見解がある(栗島2014)。

(3) 時期

ヒスイ製大珠は前期後葉から出現し、後期前葉から中葉には終焉を迎える。初現期は転石や剥片を加工した不定形が多く、中期中葉(大木8a式期)に鯉節形・緒締形・根付形が定型化し、小型化しながらも後葉には最盛期を迎える傾向にある。当該時期は長者ヶ原遺跡をはじめ生産遺跡でも最盛期を迎える時期である。後期後葉以降は垂玉など小型製品が多くみられ、晩期までには勾玉なども見受けられるようになる。

当県では、縄文土器型式に照らして詳細な時期比定ができた資料はごくわずかであったが、今のところ、集落の主体が中期前葉から中葉(大木7b～8a式期)の七郎内C遺跡や南堀切遺跡例が県内では初段階に位置付けられそうだ。その後、中期後葉(大木8b～9式期)にかけては、法正尻遺跡、桑名邸遺跡、月崎A遺跡、塚越遺跡、我満平遺跡、岡野田遺跡が続き、中期末では馬場中路遺跡、曲木沢遺跡、上納豆内遺跡、小田口D遺跡など郡山市周辺に集中し、盛期を迎えている。

ヒスイ製大珠が盛期を迎える中期後葉は、大木式土器が大木7b式期頃から南下をはじめ、大木8b式期頃に火炎土器と相互に影響し合った土器や明らかに搬入品と思われる土器などが散見されるようになる時期である。法正尻遺跡、桑名邸遺跡、石生前遺跡(写真1)、塚越遺跡、郡山市域の遺跡などでは

※柳津町教育委員会所蔵



写真1 石生前遺跡出土ヒスイ製小珠

このことが顕著で、法正尻遺跡にあつては北陸系土器(上山田・天神山式土器)の影響がある土器も出土していることから、生産遺跡周辺との往来が多分に想定される。法正尻遺跡、七郎内C遺跡をはじめ、阿玉台式土器・加曾利E式土器など中期関東系土器が確認されている遺跡は多い。

坪井上遺跡では火焰型土器の明らかな搬入品と思われるものが出土しており、優品を多数保有することも含め、ヒスイ製大珠を考えるうえでは最重要遺跡の一つであることは間違いない。

(4) 分布状況～移動と流通～

全国的な分布状況については、前述のとおり「長野・山梨ルート」及び「新潟・福島ルート」が大動脈であるとの見解がある。原産地から同心円状に分布するのではなく、優品ほど遠隔地へ運ばれており、このことはヒスイとコハクに共通する。

本県では、大きく阿賀野川流域、阿武隈川流域に分布の中心があり、郡山市以南に多い傾向にある。上記の「新潟・福島ルート」で新潟県から阿賀野川を経由して奥羽山脈を越え阿武隈川に至るルートも想定されるが、中通り地方に多いことを考慮すると、栃木・茨城方面からの北上ルートも想定できないだろうか。茨城県域からは久慈川、栃木県域からは下野街道や那須ルートなどからの流入があっても良いと考える。他の遺物(モノ)の動きともリンクさせ、このような視点からも引き続き検討してみたい。

(5) その他

焼かれた大珠

被熱痕のあるヒスイ製大珠はさほど珍しいものではなく、茨城県では約20%に被熱痕があり、坪井上遺跡では完形品8点中7点に認められるという(瓦吹2012)。

ヒスイの被熱については、宮島宏による言及がある(宮島2018)。ヒスイは火中に入れて加熱し急冷するとクラックが生じて割りやすくなるという。遺跡から発見されるヒスイ原石の中には表面が風化し

ているものがあり、それは小割りの際の被熱に起因するとした。ちなみに製品は、表面を研磨するため被熱部分が削りとられ、表面の風化度合いは格段に下がるという。

筆者は、「縄文時代講座2」の準備で、福島県内出土のヒスイ製大珠をできるだけ実見することに努めた。その中で、表面がザラつき薄茶色くなったヒスイがあることに気づいた。顕著なのは馬場中路遺跡及び曲木沢遺跡の大珠であったが、思い返してみればそのようなものが意外と多かったように思う。宮島の指摘は原石への言及であったが、製品への被熱はどうとらえるべきか。北川前遺跡の小珠は、被熱し粉々に砕かれていた。馬場中路遺跡も曲木沢遺跡の大珠も欠損品であることから、被熱は破壊又は分割行為に付随する可能性が大いに考えられる。

では、坪井上遺跡など完形品に対する被熱行為はどうか。火にかける行為自体に意味があるとするならば、大珠としての役目を終わらせるための行為と考えられるし、分割の観点から見れば打割して分配するための準備とも考えられる。

いずれにしても、被熱はその視点をもってよく資料を観察することが必要であることを改めて感じた。県内での被熱資料は一定程度あると思われる、このことはヒスイ製大珠のゆく末、在り方(廃棄・分配のための行為等)にもかかわる可能性があるので、今後の課題として注視していきたい。

異素材の大珠等

ヒスイと同等の価値を持つ威信財として考えられているのがコハクで、原産地こそ違いますが、その価値基準や流通、在り方には共通する部分があるとされる(栗島2012)。管見のため一概には言えないが、当県では中期においてコハクを単独で出土する遺跡はなく、別遺構であるが必ずヒスイも出土する傾向にある。さらに、出土遺構が近距離であったり、対面にあったりするなど、遺構配置も特徴的である。ヒスイ原産地(糸魚川)、コハク原産地(銚子)とおおよその距離が等距離に位置する当県においては、両者の価値はどう捉ればよいだろう。残念ながらコハクはヒスイと違い樹脂の化石で、もろく土に還りやすく、遺跡から発見されにくいことは否めないため、このことに言及することは慎重を要する。なお、当県はいわき市にも原産地があることも忘れてはな

らない要素である。

コハク以外では、郡山市及び小野町出土の3点について鯉節形大珠等を紹介したが、こうしたものが全国にも一定程度存在するようである。ヒスイ製大珠の出土が少ない西日本、特に九州地方では、異素材大珠の出土が目立つ。九州地方ではヒスイ製大珠は3点のみの出土で、他はクロム白雲母やこれに類似する薄緑色の石材、濃緑色の蛇紋岩が利用されている。大坪志子は、時間的・空間的な距離がある九州では、「ヒスイであること」という希少財に対する価値観が失われ、鯉節形の大珠は、美石選択の意識と形態の情報のみが伝わり、威信財ではなく単に装身具としての機能を果たしていたとする(大坪2015)。

この考えに照らすと、注目されるのが矢大臣遺跡の後期前葉の大珠で、ヒスイ製大珠の盛行から後出であることを考慮すると、ヒスイの価値が薄れ、その形態、分割行為だけが情報として引き継がれた結果と捉えることができるのかもしれない。

なお、丹念に見れば、他にも県内に類例はあると思われる。これらをヒスイ製大珠と比較することにより、ヒスイを使った大珠の価値がより顕在化するかもしれない。これらについては、引き続き注視していきたい。

5 福島県から見たヒスイ製大珠

以上をまとめると、福島県内のヒスイ製大珠は、拠点集落から出土すること、墓に副葬されること、中期後葉に盛期を迎えることなど、全国的な傾向に矛盾しないことが追認できた。新たに見いだせた特徴としては、被熱資料や異素材の大珠の存在があること、阿武隈川流域の郡山市以南に分布の中心があること、コハク出土遺跡＝ヒスイ出土遺跡の傾向にあることなどが挙げられる。

法正尻遺跡及び南堀切遺跡では墓と推定される特殊な形態を呈する土坑からの出土で、遺跡内でも特別な被葬者へ供えられたものと言ってよいだろう。一方で、打ち割られたり、火にかけられて粉々にされたりしてその役目を終えたようなものや、打ち割った後二次加工して再びよみがえらせたようなものもあり、ヒスイ製大珠の価値、在り方について、全国的な類例に照らしつつ、引き続き検討していく

べきである。

県内には中期の拠点集落が多数発見されているが、ヒスイ製大珠が出土したのはその一部である。南会津地区や浜通り地方にも拠点集落はあるにもかかわらず、南会津地域にあつては表採すらされていない。ヒスイは希少財で特別なもの＝威信財であることに変わりはないが、拠点集落の中でも出土する遺跡としない遺跡があり、それは何に起因するのかなど、興味は尽きないところである。

あまり言及できなかったが、岡野田遺跡出土の未製品については、本県唯一であること、我満平遺跡と近距離にあること、盛期を過ぎた後期前葉の所産であるなど、検討すべき要素は多く、キーポイントとなる遺跡であると考ええる。なお、製品として完成させるためには、生産圏のプロ集団の専売特許ともいえる硬いヒスイを加工する技がなければ難しく、このことは道具を持って技術者が移動した可能性があることなども暗示し、ヒスイ製大珠流通の背景には、人の動きも当然ながらあるということを、私達に気付かせてくれる存在である。

6 おわりに

以上論を進めてきたが、今回は県内の傾向を示したにすぎず、自身の力不足を痛感した。しかし、管見の限りではあるが、県内出土品の集成や分布を提示できたこと、今後の課題・着眼点を整理できたことは、一定の成果があったと思う。今後は、広く浅くではなく、「集落構造からみた福島県内のヒスイ製大珠」など、テーマを絞って掘り下げることにシフトしたい。なお、図化されていない資料があること、実見できていない資料があること、網羅的に報告書を当たっていないことなどから、集成の余地はまだあるので、県内出土のヒスイ製大珠については、継続して追っていきたい。

最後に、資料を実見するにあたり、お忙しいにもかかわらず受け入れてくださった各自治体、調査機関、博物館の御担当者の皆様、「縄文時代講座2」での発表と本稿執筆の機会を与えてくださった本間宏氏をはじめとする福島県文化財センター白河館の皆様、に、厚く御礼申し上げます。

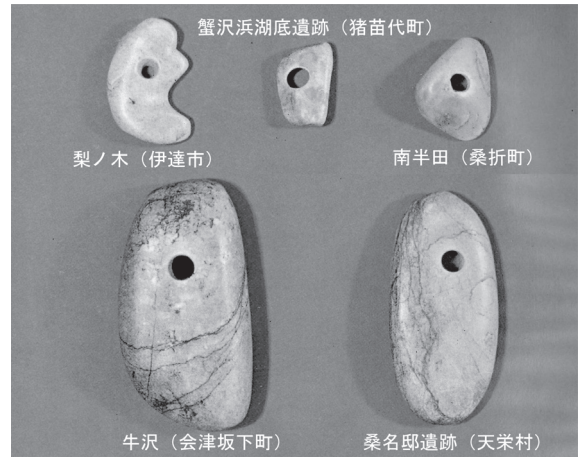


写真2 収集されたヒスイ（福島県 1964 から加筆して転載）



写真3 郡山市出土のヒスイ製大珠等（筆者撮影）



写真4 須賀川市出土のヒスイ製大珠等（筆者撮影）



写真5 白河市出土のヒスイ製大珠等（筆者撮影）

【註】

- 註1 報告書等文献に実測図があるもののみ掲載した。
- 註2 ヒスイは硬度が6.5～7で非常に硬く、自然には割れないため、b・c類の状態であれば人工的に打ち割ったと考えるのが妥当である。
- 註3 発掘調査報告書に詳述はされていないが、遺物本体の注記に「13号住炉上面」の記載がある。

【引用参考文献】

(論文等の文献)

- 大坪 志子 2015「第IV章 九州の大珠」『縄文玉文化の研究—九州ブランドから縄文文化の多様性をさぐる—』
- 瓦吹 堅 2012「茨城県の硬玉製大珠」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』
- 栗島 義明 2012「コハク製大珠の広域分布～ヒスイ大珠との相違と相似～」『縄文時代のヒスイ大珠を巡る研究』
- 栗島 義明 2014「ヒスイ製大珠の分配」『副葬品から見た縄文社会—財の生産・流通・副葬—』公開シンポジウム資料集
- 栗島 義明 2019「大珠の佩用とその社会的意義を探る」『身を飾る縄文人—副葬品から見た縄文社会—』
- 鈴木 克彦 2004「硬玉研究序論」『玉文化研究創刊号』玉文化研究会
- 福島県文化財センター白河館 2021『図録 法正尻遺跡』
- 宮島 宏 2018『国石翡翠』
- 山本 友紀 2013「福島県文化財センター白河館収蔵のヒスイ大珠について」『福島県文化財センター白河館研究紀要2012』

(集成に使用した文献)

- 会津坂下町教育委員会 2010『会津坂下町文化財調査報告書第64集 北川前遺跡 阿賀川下流狭窄部改修事業(津尻地区)に伴う発掘調査報告書』
- 飯野町教育委員会 2004『飯野町埋蔵文化財調査報告6 和台遺跡2』
- 小野町教育委員会 1992『矢大臣(新田)遺跡』
- 表郷村史編さん委員会 2011「内松B遺跡」『表郷村史』第2巻 資料編
- 郡山市教育委員会 1982『河内下郷遺跡群2 仁井田町遺跡・上納豆内遺跡』
- 郡山市教育委員会 1983「馬場中路遺跡」『郡山東部Ⅲ 穴沢地区遺跡』
- 郡山市教育委員会 1997『郡山東部22 下羽広遺跡(第2次)』
- 郡山市教育委員会 2000『平成11年度埋蔵文化財出土遺物整理保存事業 鴨打A遺跡 第二冊(遺構外編)』
- 郡山市教育委員会 2003『柳橋遺跡-発掘調査報告-』
- 郡山市教育委員会ほか 2005『阿武隈川築堤関連 町B遺跡』
- 白河市教育委員会 1981『白河市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集 高山・南堀切遺跡』
- 大信村 2004「第二節 町屋遺跡」『大信村史 第二巻 資料編上巻』
- 長沼町教育委員会 1996「塚越遺跡」『長沼町史 第2巻 資料編Ⅱ』
- 西会津町教育委員会 2003『西会津町埋蔵文化財調査報告書第7集 上小島A遺跡』
- 福島県 1964『福島県史6 考古資料編』
- 福島県教育委員会 1982『福島県文化財調査報告書第108集 国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告10 七郎内C遺跡』
- 福島県教育委員会 1985『福島県文化財調査報告書第147集 国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告18 小田口D遺

跡』

- 福島県教育委員会 1985『福島県文化財調査報告書第148集 国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告19 荒小路遺跡』
- 福島県教育委員会 1990『福島県文化財調査報告書第226集 国営総合農地開発事業 矢吹地区遺跡発掘調査報告6 桑名邸遺跡』
- 福島県教育委員会 1991『福島県文化財調査報告書第243集 東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡』
- 福島市教育委員会ほか 1997「第16次調査」『福島市埋蔵文化財調査報告書95 月崎A遺跡(6・16・18・26次調査) 飯坂南部土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告V』(第2分冊)
- 矢祭町史編さん委員会 1983「我満平遺跡」『矢祭町史 第2巻 資料編I』
- 矢祭町教育委員会 2004『岡野田遺跡発掘調査報告書 国道349号改良工事に伴う発掘調査報告書4』
- 山都町史編さん委員会 1990「第2章第1節 1上林遺跡」『福島県山都町史資料集 第2集 原始・中世』

(福島県教育庁文化財課文化財主査)